2006年度 モンゴル・スタディツアー 参加者報告

（財）日本ユニセフ協会学校事業部は、カンボジアとモンゴルで事業を指定した募金を行い支援を続けています。毎年、支援国の子どもの状況や事業の取り組みを先生たちに視察していただき、学校や地域での学習や広報活動に役立てていただいています。今回、2006年度のモンゴル・スタディツアーに参加された小学校の先生の感想とその後の学校での意欲的な取り組みをご紹介いたします。

＊「ユニセフ子ども物語」で、視察内容をご紹介しています。

大草原でのスタディツアー参加者
©日本ユニセフ協会

日　程	2006年7月23日（日）～29日（土）
日本ユニセフ協会が支援する事業	遊牧による移動生活をする子どもは、栄養や健康の面での十分なケアや、教育を受けることがむずかしい生活をしている。 こうした子どもたちの状況を把握し、子どもの生活に合わせた幼稚園事業を支援する。
視察概要	①遊牧民の子どもを対象とした移動式幼稚園及び幼稚園教員の支援活動 ②きびしい生活のため、保護を必要とする子どもに対する支援活動 ③郊外のゲル地域で劣悪な環境で生活する元遊牧民に対する支援活動

愛知県碧南市立日進小学校

教諭 本多良子

●応募の動機●●

一昨年、ボランティアの団体についてバングラデシュへ行ったときに、あまりの日本との違いに驚いた。貧しくて、毎日の生活に追われ学校に行けない子や、トイレがないから行かない子がいた。女性の識字教育や自立するための職業支援などが実施されていた。

帰国後、国際理解の授業の中で、バングラデシュのような開発途上国が世界にあることを学習させた。現地で撮影してきた写真やビデオを見せると、クラスの子どもたちの理解が早かった。

児童会で募金活動をすると、すぐユニセフに贈ろうということになるのだが、みんなが協力したお金が実際にどのように使われているのかぜひ見てみたいと思っていた。『T・NET通信』でモンゴルのスタディツアー参加者募集を見てその気持ちが高まった。

豊かすぎる生活を当たり前のように思っているクラスの子どもたちに、世界を知ることで自分たちの生活をふり返らせる機会になることを願い応募した。

幼稚園に通う女の子から自分で作った作品をプレゼントされる本多先生
©日本ユニセフ協会

●視察の感想●●

最初にモンゴルのユニセフ事務所での概況説明。そして、罪を犯した子どもたちの拘留センター等を見学した。

バガヌール（ウランバートルの東）では日本ユニセフ協会が日本の学校からの募金で支援している、ゲルで行われている遊牧民の幼児教育や、衛生面での教育などを視察した。現場で説明するスタッフの多くは30代の若い女性。どのスタッフも希望に燃え、今年度の方針を熱く語ってくれた。就学率を上げ、子どもたちに教育を受ける機会をつくることが子どもたちの幸せにつながる。それがモンゴルを豊かにするために一番大切なことなんだと感じる説明であった。

何と言っても感動したことは、授業で扱った「100円でできること」の中に出てきた「ORS（経口補水塩）」が、家族診療所で使われているのを見たことだ。子どもの下痢止めにはとても効力があることを実際に治療に使っている医師から聞き、募金がこうして生かされていることを実感した。

モンゴルで使われている「ORS（経口補水塩）」
©本多良子